平成13年（2001年）7月10日

廃棄物学会ニュース
The Japan Society of Waste Management Experts
No.63
廃棄物学会

平成13年5月28日

平成１３年度 総会開催報告

同時開催：平成12年度廃棄物学会賞表彰式

平成13年度廃棄物学会総会は平成13年5月28日に学士会館（東京、神田神保町）において開催され、正会員125名の出席と799名の委任状を併せ、会則に定める定数（正会員数の4分の1以上）を越える出席を得て開会された。

まず田中会長が挨拶に立ち、廃棄物学会の現状と直面している課題や廃棄物処理の諸分野での学会員の活躍等に対して謝意が述べられた。

引き続き、出席者の中から中明和氏を満場一致で議長に選出し、議長の指名により議事録署名人に岡田光浩及び四阿秀雄の両氏を選出し、議事に入った。

まず、第1号議案「平成12年度事業報告」、第2号議案「同収支決算」について藤本総務委員長から報告があり、横山監事からは「監査結果報告」が行われ、審議の結果第1号及び第2号議案は満場一致で承認された。

さらに、第3号議案「平成13年度事業計画(案)」、第4号議案「同収支予算（案）」について審議が行われた結果、両議案は満場一致で承認された。以上により、平成13年度廃棄物学会の総会の審議事項はすべて終了した。総会の閉会にあたり、田中会長から、設立以来１１年を経過した廃棄物学会の今後の活動のあり方や運営の課題などへの取り組みの必要性と学会活動への協力要請が行われ、総会は閉会した。

短い休憩時間を挟んで、同会場において平成12年度廃棄物学会賞表彰式が行われた。今回の表彰は７件であった。

有功賞は、吉葉正行氏（東京都立大学）に贈られた。氏の業績「高耐食性合金の開発導入による廃棄物発電の高効率化促進」が高く評価されての受賞となった。論文賞は3件の著者に贈られた。1件目は、松藤敏彦氏、田中信壽氏（以上、北海道大学）の両氏で、その論文「家庭系ごみ流れの推定に関する研究」が評価された。2件目は、小野芳朗、加納佐江子、青井健太郎、河原長美（以上、岡山大学）、山田正人（国立環境研究所）、今岡務（広島工業大学）の6氏で、その論文「廃棄物試料のエストロジェン様のMCF7細胞増殖活性・遺伝毒性評価」が評価された。3件目は、中村愼一郎氏（早稲田大学）で、その論文「廃棄物処理と再資源化の産業連関分析」が評価された。著作賞は、細田衛士氏（慶應義塾大学）に贈られた。氏の著書「グッズとバッズの経済学」が高く評価されての受賞となった。奨励賞は、大迫政浩氏（国立環境研究所）と長田隆氏（農業技術研究機構）の2氏に贈られた。大迫氏は、「焼却灰埋立地の浸出水等廃棄物の適正処理に関する一連の研究」が、長田氏は、「畜産廃棄物の処理過程における環境負荷ガスの発生及び制御に関する一連の研究」が評価されての受賞となった。各氏には、田中会長より表彰状と記念品が授与された。

続いて、第１１回研究発表会開催においてご尽力いただいた札幌市(市を代表して札幌市長桂信雄氏へ)、及び約7年間事務局にてご尽力いただきこの3月に退職された石川八重氏に感謝状が贈られた。

▼ 田中会長と各賞表彰者

なお、10月31日から神奈川県横浜市にて開催される第12回研究発表会において、今回の表彰者の受賞記念講演を予定しているので、会員各位の参加をお願いしたい。　　（総務委員　中田清志　記）

□■□■　年会委員会・研究委員会　■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

平成13年5月28日～29日

平成13年度研究シンポジウム開催報告

平成13年度研究シンポジウムが、平成13年5月28日（月），29日（火）の2日間、学士会館において開催された。このシンポジウムは昨年度、学会設立10周年記念事業の一環として実施したのが最初であり、今回が第2回である。毎年秋に開催される研究発表会が会員の自由応募による発表であるのに対し、学会が主体的に企画する研究発表、討論の場としてはじめたものである。実施は全体の運営を年会委員会、シンポジウムの企画を研究委員会と年会委員会が分担した。

1日目は午後からの開始で、最初のシンポジウムから会場がいっぱいになるほどの盛況となった。その後に行われた総会、懇親会の参加者も多く、総会の参加者を増やすという意味でも成功したと言える。結婚式やパーティーでは3割もの食事が廃棄物となるそうだが、今回の懇親会では発生抑制が十分果たされていたように思う。

参加者予想数は、昨年を50名以上も上回る計算となり、収支が向上すると喜んだが、事前申込者の参加率が思ったほど高くなく、最終的な有料参加者数は314名であった。昨年と較べて19人の増加である。

研究シンポジウムは、実はかなりの赤字で運営しており、不足分を秋の研究発表会で補っている。学会が行ったアンケートでも、研究シンポジウムがよく知られていないこと、開催案内が遅いことが課題として挙げられている。より魅力的なシンポジウムの企画が第一であることはもちろんだが、参加者を増やすためのＰＲが必要と考えている。開催案内は早めにお知らせするよう心がけるが、定期的な開催なので予め日程に含めていただくことをお願いしたい。

なお、シンポジウム概要については、学会誌12巻4号に掲載されます。また、シンポジウム講演論文集は、残部がありますので事務局へお問合わせ下さい。

（年会委員会幹事　松藤敏彦　記）

□■□■　国際委員会　□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

2001年5月17日～18日

韓国廃棄物学会第5回国際セッション参加報告

韓国ソウル市の北東にある国立ソウル産業大学にて、2001 年 5 月 17 日、18 日の 2 日間、韓国廃棄物関係学会共同学術大会が催された。今回は、韓国廃棄物学会と韓国資源循環研究所、韓国有機性廃棄物リサイクル会議の共催した大会であった。その中で、韓国廃棄物学会主催で第 5 回国際セッションが行われ、今回、日本からは田中会長はじめ 13 名が参加した。

17 日午後の大会開会式では日本の廃棄物学会を代表して田中会長が挨拶を述べた。国際セッションは、翌 18 日に開催され、まず冒頭に田中会長より“Waste Problems in 21 Century”と題された講演があり、各国の事情に合わせた適正な廃棄物管理の重要性について説かれた。その後、3 セッションに分かれ、各セッションとも日・韓 2 人の議事進行で行われた。日本から 11 件、韓国から 7 件、英国から 1 件の計 19 件の発表と活発な議論があった。発表内容は処理・資源化プロセスに関する研究から汚染修復、環境や経済への影響評価まで多岐に渡り、廃棄物・リサイクル問題が日韓双方とも複雑化していることが窺えた。

17 日夕方には野外パーティーが催され、日韓双方の参加者達の親交を深めた。我が国の懇親会と違って？！テーブルの上にあふれんばかりの料理が並んでいたため、気を急くことなくのんびりと食していたところ、最初は遠慮していた（儒教の国である！）学生の方々が加わったとたんに、あっという間に消失していったのには少々面食らった。やはり廃棄物学会の懇親会の料理は、残してごみとしないために足らない程度に用意するのが基本なのであろう。

廃棄物分野の専門学会がある国は筆者の知る限りでは韓国と日本だけであり、いつの日か日韓が中心となって国際学会や学術論文誌が立ち上げられないものか、後の席で議論した大きな夢である。

（山田　正人　記）

東海･北陸地区連絡会市民フォーラム **平成13年6月21日**

「都市ごみの減量化をめぐる市民フォーラム」開催報告

東海・北陸地区連絡会主催、名古屋大学難処理人工物研究センター共催の「都市ごみの減量化をめぐる市民フォーラム」が名古屋国際会議場で平成 13 年 6 月 21日（木）に開催された。第1部の話題提供では、最初に本学会を代表して田中会長から「循環型社会と都市ごみ減量化」と題する大変示唆に富む講演があった。続いて、名古屋市環境局の神下豊氏から、ごみ減量先進都市へと生まれ変わろうとする名古屋市の取り組みと、名古屋市民の“傷み”について報告があった。さらに、同市環境局の松葉基司氏からは、名古屋市の都市ごみ資源化リサイクル技術の現状について詳しい説明がなされた。また、名古屋大学の原口紘 教授からは、名古屋大学における一般ごみの減量化戦略に関する興味深い紹介があった。一方、中部リサイクル運動市民の会の萩原喜之氏は、ごみ処理に対する「市民参加」を可能にする条件と展望について市民の立場から語った。最後に土橋技術士事務所の土橋弘氏から、廃棄物の最終処分場に関する問題点の整理とその解決を目指した、とくに住民との合意形成の指針について講演があった。

第 2 部のパネルディスカッションでは、中日本建設コンサルタント㈱の辻喜礦氏の総合司会により、4 人の講師のパネラーと会場の参加者を交えて討論が進められた。ごみ問題を引き起こした都市計画の反省、生ごみ処理の対策、処分場問題などに見られる情報公開と市民参加のあり方などに論点が集中したが、90 分の討論はまたたく間に過ぎ、今後もこのような市民、自治体、企業、学者を交えた市民フォーラムを粘り強く続けることにして閉会となった。

会場には 100 余名の熱心な参加者が講師の話題に耳を傾け、討論に参加した。また、当日は報道関係者の取材も受け、地元の新聞やテレビで報道された。

（東海・北陸地区連絡会　伊藤秀章　記）

?　市民フォーラム会場風景

会員増強対策について一層のご協力をお願いします

廃棄物学会では、活動基盤を確立するため、平成12年度後半から、①全会員への会員勧誘要請文の送付、②理事、評議員への会員勧誘活動の要請、③会員アンケートの実施等、会をあげて会員増強に取り組んできました。

また、理事会では、会員増強対策検討委員会を設置し、㈠ 廃棄物学会会員の範囲拡大策、㈡ 会員のメリット調査、㈢ 会員のニーズ調査、㈣ 新たな収入源の発掘、㈤ 支部組織等の編成方針、㈥外部への情報発信、㈦ 会員勧誘の具体的計画の７項目について、各理事及び総務委員会が分担して、緊急的に対策を協議してきました。

これらの検討の中から、上記アンケートの実施など具体的な行動と、これを受けて平成13年度予算への反映などに結びつけています。

緊急的に検討を進めた７項目につきましては、いずれも今後の廃棄物学会の活動にとって方針、指針とすべき事柄です。一応の結論を得たものもありますし、なお更に検討を深めることが必要な項目もあります。

ここ数年、賛助会員の退会が相次ぎ、危機感を抱いておりましたが、平成12年度は、個人会員が460 人、公益会員が６団体、賛助会員が６社に入会していただきました。新年度当初には、16 社の賛助会員の入会がありました。これも会員各位のお力添えの成果であり、深く感謝申し上げます。

会員増強対策検討委員会は、ここで一応の役割を終

えますが、昨今の経済状況を考えますと学会活動に予断を許さない状況であることに変わりはありません。引き続き総務委員会を中心に、これらの課題解決に向け具体的な対策に取り組むこととしております。

廃棄物問題は益々複雑、かつ多様化しております。これら多くの問題、課題の解決に向け、廃棄物学会の果たすべき役割と責務は一層重要になってまいります。多くの方々の参加を得て、活発かつ適切な事業活動を展開するため会員各位の更なるご協力をお願いいたします。　（会員増強対策検討委員長　藤本　忠生　記）

【お知らせ】

―企画委員会―

平成13年度 シンポジウム・セミナー開催予定

◎廃棄物学会シンポジウム（ウエステック2001と併催）

開催予定：平成13年11月29日(木)
場所：幕張メッセ
テーマ：都市ごみ処理技術（仮）

その他にも平成13年12月頃には技術セミナー（賛助会員対象）を、平成14年2月頃には市民と学生のためのセミナーを予定しております。詳細は、今後の学会ニュース等でお知らせします。

ホームページアドレス変更のお知らせ

本学会で利用している学協会向けの無料サーバーにつきまして、運営元の国立情報学研究所（旧学術情報センター）の組織改変により、平成13年8月1日よりホームページアドレスが変更されます。

新しいアドレスは、
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jswme/index.html
です。
（10月31日までは、旧アドレスでもHPをご覧いただけます。）

新刊紹介

『大阪府豊能郡ダイオキシン公害調停記録集 1998.9～2000.7』
発行所:公害調停記録集編集委員会
Tel:06-6314-4188　定価:5,000円＋税

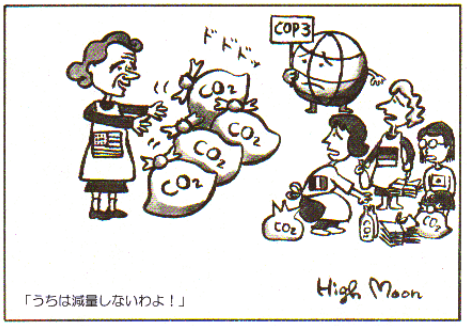
平成13年度会費納入のお願い

平成13年度会費を納入いただいていない正・学生会員の方は、お手元の払込取扱票により、早急にご送金下さいますようお願い申し上げます。郵便局備え付けの払込票に下記郵便振替口座をご記入いただき、ご送金いただいても結構です。その際、会員番号、会員名を明記して下さい。なお、本年度は第7期役員選挙が行われます。選挙権、被選挙権有資格者は、9月末日までに年会費を完納している正会員です。ご留意下さい。

郵便振替口座：00140-6-134041
加 入 者 名 ：廃棄物学会

会員状況	H13.6.30現在 （　）内は、H13.4.1以降の増減
正会員	3,525（122）
学生会員	249（14）
外国人会員（DM）	19（0）
公益会員	113（2）
賛助会員	211（10）
計	4,117（148）

注）外国人会員(DM)は、廃棄物学会外国人等会員規程第4条に定める会員を示す。



事務局夏季休暇
平成13年8月13日～15日

☆☆　事務局だより　☆☆

家電リサイクル法の施行後、家電製品の不法投棄のニュースを耳にするようになりました。3月には「今なら処理費不要」というセールも行われ、販売量も伸

廃棄物学会ニュースNo.63　平成13年7月10日発行
廃棄物学会　〒108-0014東京都港区芝5-1-9豊前屋ビル5F
Tel.03-3769-5099　Fax.03-3769-1492
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jswme/index.html
古紙配合率100%再生紙を使用しています

びたそうです。建設リサイクル法の施行前の駆け込み不法投棄も増えているようです。家電製品や自動車などの不法投棄は町中でも見られます。大規模な不法投棄現場には必ず家屋と思われる残骸や家具類が混ざっています。処理施設はますます作りにくくなっています。処理にかかるコストはどんどん高くなっていくでしょう。悪意を持った人にとっては、処理費が高くなれば利益も多くなるため、手口は悪質化、巧妙化します。不法投棄現場に捨てられた残骸は、元の持ち主と捨てた行為に関わった人に金銭的な利益をもたらした証です。「不法投棄に関わったことは絶対にない」と自信を持っていえる人ってどれだけいるでしょう。「今なら処理費不要」セールに飛びついた人は「？」かもしれませんね。たばこなどのポイ捨ての覚えがある人も論外です。これらを防ぐためにもリサイクル法の本来の趣旨を知ってもらうなど教育こそが大切です。廃棄物学会の大きな役割のひとつです。

（香川　智紀　記）